

15 章

【新改訳改訂第3版】黙 15:1

また私は、天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。神の激しい怒りはここに窮まるのである。

●15 章は黙示録の中では最も短い章で最後のさばきの序章のような位置にあります。11 章 15 節で第七の御使いがラッパを吹き鳴らした後、12～14 章の長い挿入的な部分がありました。そして 16 章から世界的規模の最後のさばきが始まります。しかし、地上で起こるすべてのさばきは、すでに天で準備されているものが地に向かって執行されるというかたちです。ヨハネは天において「一つの巨大な驚くべきしるし」を見ました。それは「最後の七つの災害を携えた七人の御使いたちの姿」でした。

●15 章 1 節にある「天にもう一つの巨大な驚くべきしるしを見た」の「もう一つの」とは、挿入句(12～14 章)であった最初の箇所「また、巨大なしるしが天に現われた。」(12:1)とあります。そこでの「巨大なしるし」とは、「ひとりの女」と「大きな赤い竜」のことであり、その「巨大なしるし」に続いてという意味です。

●15 章 1 節で「神の激しい怒りはここに窮まるのである」と表現されています。ちなみに、「窮まる」と訳されたギリシア語は「テレオー」(τελέω)のアオリスト受動態で、「終わる、完結される、終了される」という意味です。その内容が 16 章に記される全世界的な規模の七つの災害です。それまでのさばきは全地の 1/3 に抑えられていました。

●ヨハネは、この後、二つの光景(しるし)を見ました。その一つは「獣(反キリスト)と、その像と、その名を示す数字(666)とに打ち勝った人々の礼拝」の光景であり、もう一つは「天にある、あかしの幕屋の聖所が開いて、七つの災害を携えた七人の御使いが、四つの生き物の一つから、さばきのための鉢を手渡された」光景です。

(1) 「獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々」の礼拝の光景

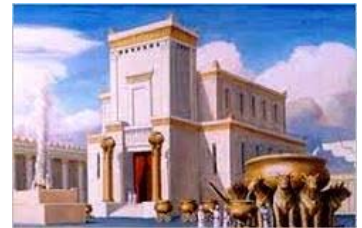
●内容的には、火の混じったガラスの海のほとりに立っている人々、すなわち、「獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々」(大患難時代において獣の刻印を受けることなく殉教した者たち)が、モーセの歌と小羊の歌とを歌いながら神を礼拝している姿です。14 万 4 千人には特別な「新しい歌」が与えられていましたが、ここでの殉教者たちにも二つの歌が与えられています。一つは「モーセの歌」(出エジプト記 15 章、あるいは申命記 32 章だと解釈する人もいます)であり、もう一つは「小羊の歌」(イエシュアによる贖いの歌)です。彼らの賛美の内容は以下のとおりです。

【新改訳改訂第3版】15 章 3～4 節

3・・「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、真実です。もろもろの民の王よ。4 主よ。だれかあなたを恐れず、御名をほめたたえない者がいるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。」

●「あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです」というフレーズは、「偉大で」と「驚くべき」の二つの形容詞によるものです。15章1節の「巨大な驚くべき」しるしにも同じギリシア語が使われています。二つの形容詞、「メガス」(μέγας)と「ソーマストス」(θαυμαστός)を、接続詞(και)でつなげることで、ヨハネがこれまでに見たことのないものであることが強調されています。つまり、これから起こることは、それまで人類が経験したことのない未曾有の出来事なのです。

●人々が立っていたのは、「火の混じったガラスの海」とされています。黙示録4章6節では、「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようなであった」とありますが、ここでは、「火の混じった、ガラスの海のような」とされています。聖書の中で「ガラスの海」という表現は二箇所のみです(4:6, 15:2)。かつてのソロモン神殿では、神に仕える祭司たちが手足の汚れを洗い落とすための洗盤がありましたが、その洗盤のことを「海」と呼んでいました。天にある「海」はもはや人々が手足を洗う必要はありません。ですから、ガラスの海のようなのでした。その「ガラスの海」のほとりに、神の立琴を手にして神を賛美している人々をヨハネは見たのです。



(2) 七人の御使いにさばきのための鉢を手渡された光景

●ヨハネはもう一つの光景を見ます。それは、「天にある、あかしの幕屋の聖所」が開いた光景です。モーセの幕屋もダビデの幕屋も、そしてソロモン神殿もすべては天にある本当の聖所のコピーです。天の聖所には、御座があり、神の臨在と栄光が満ちています。ヨハネは、天の御座における聖所から、「七つの災害を携えて出て来た七人の御使い」を見ました。彼らは、きよい光り輝く亜麻布を着、胸には金の帯を締めていました。彼らは、四つの生き物の一つから神の「御怒りに満ちた七つの金の鉢」が手渡されたのです。

●「鉢」と訳されたギリシア語は「フィアレー」(φιαλή)※で、「水」を入れる取っ手のついた器のことで、中身を一気に注ぐことのできる器です。神の聖なる御座から、未曾有のさばきを一気に人々の上に下すためのものです。そのような「鉢」が七つの御使いに一つずつ与えられたのです。その中身については、【付録】の「ヨハネの黙示録の構造(6～16章)」を参照のこと。

※「フィアレー」(φιαλή)は、黙示録にのみ使われている語彙です。

12回— 5:8/15:7/16:1, 2, 3, 4, 8, 10, 12, 17/17:1/21:9

【付録】

ヨハネの黙示録の構造(6～16章)

七つの封印のさばき

第一の封印 (6:1)
第二の封印 (6:3)
第三の封印 (6:5)
第四の封印 (6:7)
第五の封印 (6:9)
第六の封印 (6:12)
第七の封印 (8:1)

—— **七つのラッパのさばき** ——(全地の 1/3 が対象)

第一のラッパ (8:7)
第二のラッパ (8:8)
第三のラッパ (8:10)
第四のラッパ (8:12)
第五のラッパ (9:1)
第六のラッパ (9:15)
第七のラッパ (11:15)

—— **七つの鉢のさばき** (全世界規模)

第一の鉢 (16:2) 獣の刻印を受けた者に悪性の腫物
第二の鉢 (16:3) 海がすべて血となる
第三の鉢 (16:4) 川も水源もすべて血となる
第四の鉢 (16:8) 灼熱の太陽で人々は焼かれる
第五の鉢 (16:10) 獣の国が暗黒となる
第六の鉢 (16:12) 戦いのためにハルマゲドンに集結
第七の鉢 (16:17) 未曾有の強い大地震(都は三分割)

16章

●前頁のチャートにあるように、16章に記されているのは「七つの怒りの鉢」で、この世に住む人々に最後の全世界的規模の神のさばきが下ります。七つの封印のさばき、七つのラッパのさばき、七つの鉢のさばきを見ると、その災害の規模は回を重ねるごとにひどく、そして広範囲になっていきます。特に、七つの鉢のさばきはキリストの再臨の直前に起こる出来事で、神の怒りは頂点に達したことの現われです。神は忍耐をもって人々が悔い改めるのを待っておられました、人間が罪の道を歩み続けた結果として下されることになる「真実な、正しいさばきです。」(16:7)。従って、そのさばきは「やむを得ず」下されるさばきなのです。しかも、このようなさばきの中でも「彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった」のです(16:9, 11を参照)。エデンの園以来、人間は神に反逆を重ねてきましたが、神は悔い改めて神に立ち帰るのを望んでおられます。にもかかわらず、「もし神がいるなら、どうして・・・のことを許すのか。どうして・・・を放置しておくのか。」と神にけがしごとを言っています。旧約において預言されたメシア王国の実現の直前には、この世に住む人々の上に最後のさばきが下ることを心に留めたいと思います。

第一の鉢 (16:2) 獣の刻印を受けた者に悪性の腫物

16:2 そこで、第一の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけた。すると、獣の刻印を受けている人々と、獣の像を拝む人々に、ひどい悪性のはれものができた。

●「ひどい悪性のはれもの」は、かつてエジプトでの第六番目の災いと似ています(出9:9~10)。そのときは、エジプト全土の人と獣に、うみが出る腫物ができたと記されています。

第二の鉢 (16:3) 海がすべて血となる

16:3 第二の御使いが鉢を海にぶちまけた。すると、海は死者の血のような血になった。海の中のいのちのあるものは、みな死んだ。

●微生物の過度な繁殖で赤潮が出来るという現象がありますが、「海の中のいのちのあるものは、みな死んだ。」とは、想像し得ないような出来事です。第二のラッパのさばきの時にも、海の三分の一が血となっています(8:8)。

第三の鉢 (16:4~7) 川も水源もすべて血となる

16:4 第三の御使いが鉢を川と水の源とにぶちまけた。すると、それらは血になった。

16:5 また私は、水をつかさどる御使いがこう言うのを聞いた。「今いまし、昔います聖なる方。あなたは正しい方です。なぜならあなたは、このようなさばきをなされたからです。」

16:6 彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しましたが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者たちです。」

16:7 また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

●海のみならず、「川」「水源」が血に変わります。当然、飲み水もその災害を被ります。それは、血以外に飲むものがなくなることを意味しています。このさばきの根拠が「聖徒たちや預言者たちの血を流した」結果としてもたらさ

れたものであるとあります。つまり、「血を流した」とは、剣によって殺害したことを意味します。7節の「祭壇」とは、殉教者たちの避難所を意味しています(第五の封印のさばき、6:9~11を参照)。

第四の鉢 (16:8) 灼熱の太陽で人々は焼かれる

16:8 第四の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。

16:9 こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。

●第三の水不足で枯渇している地に、灼熱の太陽の熱が害をもたらすのです。人間が生存する環境が根底からゆがめられるのです。第四のラッパのさばき(8:12)では、太陽の三分の一が暗くなりましたが、ここでは反対に「激しい炎熱」で焼かれる災害が起こります。クーラーと扇風機をいくら効かせたとしても役に立たないほどの熱さで、人が焼かれるほどなのです。

第五の鉢 (16:10~11) 獣の国が暗黒となる

16:10 第五の御使いが鉢を獣の座にぶちまけた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦しみのあまり舌をかんだ。

16:11 そして、その苦しみと、はれものとのゆえに、天の神に対してけがしごとを言い、自分の行いを悔い改めようとしなかった。

●10節にある「獣の座」「獣の国」とは、全世界と同義と言えます。「獣」は人々を支配することができても自然界を支配することはできないようです。「暗やみ」のゆえに、「人々は苦しみのあまり舌をかんだ」とあります。恐れと絶望のゆえに多くの者が自殺するのかも知れません。

第六の鉢 (16:12~16) 戦いのためにハルマゲドンに集結

16:12 第六の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけた。すると、水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。

16:13 また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。

16:14 彼らはしるしを行う悪霊どもの霊である。彼らは全世界の王たちのところに出て行く。万物の支配者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。

16:15 ——見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである——

16:16 こうして彼らは、ヘブル語でハルマゲドンと呼ばれる所に王たちを集めた。

●「水は、日の出るほうから来る王たちに道を備えるために、かれてしまった。」とあるように、第六の鉢によって、ユーフラテスの川が枯渇し、それによって「日の出るほうから来る王たち」、すなわち、東の王たちによる侵略が可能となります。そこには、中国、インド、日本も含まれているかもしれません。今日の日本の「集団的自衛権」もそうした流れの中にあるならば、避けることはできない歴史的必然かもしれません。さ



らに、「汚れた霊ども」が、ハルマゲドンと呼ばれるメギドの谷に、世界中から神への反逆分子である王たちを集めます。それは、「万物の支配者である神の大なる日の戦いに備え」るためです。

●「メギド」はエルサレムから北に 96km の地にあり、そこには広大な平野が広がっています。戦略上要衝の地であることから、「メギドの平地」は歴史の中で多くの戦いの場となってきました。

例として、

①士師記 5 章 19～21 節の「キシオン川の戦い」(カナンの王ヤビンの九百台の戦車を率いる將軍シセラとバラク率いるイスラエル軍との戦い)。

②士師記 6 章 33 節～7 章 25 節の「イスレエルの戦い」(ギデオンの三百人の兵士によって東の国々に勝利)

③ I サムエル 31 章の「ギルボア山の戦い」(サウルがペリシテとの戦いで戦死した場所)

④ II 列王記 23 章 29 節の「メギドの戦い」(ユダの最善王ヨシヤがエジプトのパロ・ネコとの戦いで戦死した場所)



第七の鉢 (16:17) 未曾有の強い大地震(都は三分割)

16:17 第七の御使いが鉢を空中にぶちまけた。すると、大きな声が御座を出て、聖所の中から出て来て、「事は成就した」と言った。

16:18 すると、いなずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほど大きな、強い地震であった。

16:19 また、あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れた。そして、大バビロンは、神の前に覚えられて、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。

16:20 島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった。

16:21 また、一タラントほどの大きな雹が、人々の上に天から降って来た。人々は、この雹の災害のため、神にけがしごとを言った。その災害が非常に激しかったからである。

●かつてなかったほどの大地震が起こります。この大地震によって「あの大きな都は三つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れ」とあります。「あの大きな都」とは、エルサレムのことではなく、「諸国の民の町々」も含んでいることから、「大バビロン」と考えられます。17 章ではこの大バビロン(「大淫婦」とも呼ばれます)に対するさばきが記されているからです。この「大バビロン」(大淫婦)は、地上において世界中の国々の王たちを支配する政治的・宗教的な組織と考えられます。

17章

●17～20章まで、ひとつのまとまりを持っています。それは「厳粛なさばき」という点からです。

- (1) 「大淫婦へのさばき」(17章)
- (2) 「大バビロンに対するさばき」(18章)
- (3) 「反キリストとにせ預言者に対するさばき」(19章)
- (4) 「獣に従った人々へのさばき」(19章)
- (5) 「ゴグとマゴグに対するさばき」(19章)
- (6) 「大きな白い御座のさばき」(20章)
- (7) 「サタンに対するさばき」(20章)

●今回は、17章の「大淫婦へのさばき」に注目してみましょう。

1～6節・・・御使いのひとりが見たこと

7～18節・・・その説明

●七人の御使いのひとりがヨハネのところにきて、「大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。」と言っています(1節)。17章の特徴はすべて比喩的な表現が使われていることです。「大水の上にすわっている大淫婦」の正体は何でしょう。

(1) 「大淫婦」「女」「母」「大バビロン」はすべて同義

【新改訳改訂第3版】

- 1 また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。
- 2 地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです。
- 3 それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。
- 4 この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持っていた。
- 5 その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン」という名であった。
- 6 そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

●「大淫婦」(「ヘー・ポルネー・ヘー・メガス」ή πορνη ή μεγας)は「女」(ή γυνή)、「母」(ή μήτηρ)、「大バビロン」(Βαβυλὼν ή μεγάλη)と同義です。すべて単数形で表わされたひとつの世界的な組織を表わしていると考えられます。それは宗教的にも、政治的にも巨大な力をもっている組織と言えます。なぜなら、「地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔った」(2節)とあるからです。また、「この女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っている」(6節)とあります。「酔う」とはどんなイメージでしょ

うか。

●この大淫婦(女、母、大バビロン)の身なりは、「紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り」(4節前半)とあるように、とてもすばらしく見えます。おそらくそれを見た人々は強烈な印象を受けるはずですが、しかしその美しい外面とは裏腹に、その本質は「憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持って」いるのです。そして、「その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「**すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン**」という名であった。」(5節)のです。17章5節では「大バビロン」ですが、18節では、「地上の王たちを支配する大きな都」と表現されています。それは神の民を抑圧する偽りの組織の根源とも言えます。

(2) 秘められた名

●「意味の秘められた」とは、「ミステーリオン」(μυστήριον)という言葉で、「今まで隠されてきたことが、神の啓示によって明らかにされたこと」を意味します。7節以降ではヨハネが見たことを御使いが丁寧に説明しています。

【新改訳改訂第3版】

- 7 すると、御使いは私にこう言った。「なぜ驚くのですか。私は、あなたに、この女の秘義と、この女を乗せた、七つの頭と十本の角とを持つ獣の秘義とを話してあげましょう。
- 8 あなたの見た獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。そして彼は、ついには滅びます。地上に住む者たちで、世の初めからいのちの書に名を書きしるされていない者は、その獣が、昔はいたが、今はおらず、やがて現れるのを見て驚きます。
- 9 ここに知恵の心があります。七つの頭とは、この女がすわっている七つの山で、七人の王たちのことです。
- 10 五人はすでに倒れたが、ひとりは今おり、ほかのひとは、まだ来ていません。しかし彼が来れば、しばらくの間とどまるはずです。

●「**七つの頭と十本の角**」13章1節には「私は見た。海から一匹の獣が上って来た。これには十本の角と七つの頭があった」とあります。「頭」と「角」の順序が逆になっていますが同じことです。「七つの頭」とはすべて「海」(地中海のこと)を共通にしています。おそらくエジプト、アッシリヤ、バビロン、メディア・ペルシア、ギリシア、そしてローマ、そしてやがて復興する大バビロンの七つのことを意味します。また「七つの山」「七つの王たち」のこともあります。10節の「五人はすでに倒れたが」の「五人」とは、エジプト、アッシリヤ、バビロン、メディア・ペルシア、ギリシアの王のことです。すべて神に反逆した帝国です。また、「ひとは今おり」とはローマ帝国の皇帝のことで、「ほかのひとは、まだ来ていません」の「ほかのひとり」とは七番目の王のことであり、キリストの再臨の前に現われる「反キリスト」のことです。「彼が来れば、しばらくの間とどまるはずです。」とあります。

●「**十本の角**」についての説明は12～13節にあります。

【新改訳改訂第3版】

- 12 あなたが見た十本の角は、十人の王たちで、彼らは、まだ国を受けてはいませんが、獣とともに、一時だけ王の権威を受けます。
- 13 この者どもは心をつにしており、自分たちの力と権威とをその獣に与えます。

●上の説明によれば、反キリストは十本の角、すなわち十か国連合の中から台頭するものと考えられます。しかし、反キリストは十人の王たちのうちの三人を征服することによって、残る七人の王は「心をつにして、自分たちの力

と権威とをその獣に与える」とあるように、反キリストは十か国連合の最高指導者となります。11節(この節は難しい節)にある「先の七人のうちのひとり」という表現は、同じ性質を持った者、すなわち、神に反逆する者)を意味すると考えられます。この反キリストについて、御使いは 15~18 節において三つにまとめています(時系列的には逆ですが)

(3) 反キリストによる支配について

① 小羊と戦う

17:14 「この者どもは小羊と戦いますが、小羊は彼らに打ち勝ちます。なぜならば、小羊は主の主、王の王だからです。また彼とともにいる者たちは、召された者、選ばれた者、忠実な者だからです。」

●「小羊」とは「主の主、王の王」であるイエシュアのことです。反キリストはこの小羊と戦おうとしますが、その結果がすでに御使いによって告げられています。

② 全世界に大きな影響力を与えるが、やがて自滅する

17:16 「あなたが見た十本の角と、あの獣とは、その淫婦を憎み、彼女を荒廃させ、裸にし、その肉を食い、彼女を火で焼き尽くすようになります。」

17:17 「それは、神が、みことばの成就するときまで、神のみこころを行う思いを彼らの心に起こさせ、彼らが心を一つにして、その支配権を獣に与えるようにされたからです。」

●興味深いことに、大淫婦の最後はなんと彼が支配していた王たちによってもたらされるということです。こうした「自滅の論理」は、神の統治の特徴です。聖書の歴史の中にそのあかしが数多く見られます。ここでは「十人の王たち」は、大淫婦を滅ぼすための「器」として用いられることになるのですが、彼らは自分たちが神のみこころを行っているという自覚は全くありません。

③ 巨大な支配組織が出現する

17:18 「あなたが見たあの女は、地上の王たちを支配する大きな都のことです。」

●反キリストの支配する都は巨大な世界統一機構です。

18章

●17章では「大淫婦のさばき」が記され、18章では「大バビロンのさばき」が記されています。「大淫婦」も「大バビロン」も同義で密接な関係を持っています。「大淫婦」も「バビロン」も単数女性名詞です。「バビロン」は、「大きな都、力強い都」です。その都は神を求めない人々が自分の欲望を満たすための場所とします。18章の概略は以下の通りです。

(1) 1～3節・・・バビロンの滅びの宣告。「倒れた。大バビロンが倒れた。」

【新改訳改訂第3版】

- 1 この後、私は、もうひとりの御使いが、大きな権威を帯びて、天から下って来るのを見た。地はその栄光のために明るくなった。
- 2 彼は力強い声で叫んで言った。「**倒れた。大バビロンが倒れた。**そして、悪霊の住まい、あらゆる汚れた霊どもの巣くつ、あらゆる汚れた、憎むべき鳥どもの巣くつとなった。
- 3 それは、すべての国々の民が、彼女の不品行に対する激しい御怒りのぶどう酒を飲み、地上の王たちは、彼女と不品行を行い、地上の商人たちは、彼女の極度の好色によって富を得たからである。」

(2) 4～8節・・・神の民への勧告「彼女から離れなさい。その都から出て行きなさい。」

【新改訳改訂第3版】

- 4 それから、私は、天からのもう一つの声がこう言うのを聞いた。「わが民よ。この女から離れなさい。その罪にあずからないため、また、その災害を受けないためです。
- 5 なぜなら、彼女の罪は積み重なって天にまで届き、神は彼女の不正を覚えておられるからです。
- 6 あなたがたは、彼女が支払ったものをそのまま彼女に返し、彼女の行いに応じて二倍にして戻しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中には、彼女のために二倍の量を混ぜ合わせなさい。
- 7 彼女が自分を誇り、好色にふけたと同じだけの苦しみと悲しみとを、彼女に与えなさい。彼女は心の中で『私は女王の座に着いている者であり、やもめではないから、悲しみを知らない』と言うからです。
- 8 それゆえ一日のうちに、さまざまの災害、すなわち死病、悲しみ、飢えが彼女を襲い、彼女は火で焼き尽くされます。彼女をさばく神である主は力の強い方だからです。

(3) 9～24節・・・バビロンが滅びたことに対する悲嘆(地上の王たちと商人たち、そして船主たちの)

●大バビロンの滅びは一瞬にして来ます。かつてのバビロンがそうであったように。

【新改訳改訂第3版】

- 9 彼女と不品行を行い、好色にふけた地上の王たちは、彼女が火で焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣き、悲しみます。
- 10 彼らは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、こう言います。『わざわざいが来た。わざわざいが来た。大きな都よ。力強い都、バビロンよ。あなたのさばきは、一瞬のうちに来た。』

ヨハネの黙示録を味わう

- 11 また、地上の商人たちは彼女のことで泣き悲しみます。もはや彼らの商品を買う者がだれもないからです。
- 12 商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、香木、さまざまの象牙細工、高価な木や銅や鉄や大理石で造ったあらゆる種類の器具、
- 13 また、肉桂、香料、香、香油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、それに馬、車、奴隷、また人のいのちです。
- 14 また、あなたの心の望みである熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい、あらゆるはでな物、はなやかな物は消えうせて、もはや、決してそれらの物を見いだすことができません。
- 15 これらの物を商って彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを恐れたために、遠く離れて立っていて、泣き悲しんで、
- 16 言います。『わざわいが来た。わざわいが来た。麻布、紫布、緋布を着て、金、宝石、真珠を飾りにしていた大きな都よ。
- 17 あれほどの富が、**一瞬のうちに荒れずたれてしまった。**』また、すべての船長、すべての船客、水夫、海で働く者たちも、遠く離れて立っていて、
- 18 彼女が焼かれる煙を見て、叫んで言いました。『このすばらしい都のような所がほかにあろうか。』
- 19 それから、彼らは、頭にちりをかぶって、泣き悲しみ、叫んで言いました。『わざわいが来た。わざわいが来た。大きな都よ。海に舟を持つ者はみな、この都のおごりによって富を得ていたのに、それが**一瞬のうちに荒れずたれるとは。**』

(4) 20 節・・聖徒たちよ、この都のことで喜べ

- 20 おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」

●神はついに、神の民のために大バビロンをさばかれたのです。

(5) 21 節・・完全なバビロンの滅びのピクチャーと神のさばきの成就

- 21 また、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を取り上げ、海に投げ入れて言った。「大きな都バビロンは、このように激しく打ち倒されて、もはやなくなって消えうせてしまう。」
- 22 立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを鳴らす者の声は、もうおまえのうちに聞かれなくなる。あらゆる技術を持った職人たちも、もうおまえのうちに見られなくなる。ひき臼の音も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。
- 23 ともしびの光は、もうおまえのうちに輝かなくなる。花婿、花嫁の声も、もうおまえのうちに聞かれなくなる。なぜなら、おまえの商人たちは地上の力ある者どもで、すべての国々の民がおまえの魔術にだまされていたからだ。
- 24 また、預言者や聖徒たちの血、および地上で殺されたすべての人々の血が、この都の中に見いだされたからだ。」

●ここには大バビロンの都としてのすべての機能が崩壊して、通常の生活がすべて完全にストップしてしまうのです。

●実は、黙示録 18 章は、**イザヤ書 3 章 18~23 節**で語られていることが成就していると見ることができます。

「終わりの日」に、反キリストと契約を結んだユダヤ人はなんらかの形で、膨大な経済的な益を手にすると考えられます。そのために「シオンの娘たちは高ぶる」(イザヤ 3:16)ようになるのです。主はそうした原因となるものを「除かれる」のですが、その一つとして、すべての「贅沢品」が「除かれる」とあります。

●ヨハネの黙示録 18 章には、反キリストに指導される巨大な経済システム機構である「大バビロン」が倒れることが御使いによって宣告されています。地上の王たちは「大バビロン」と不品行を行い、地上の商人たちもその機構の中で極度の贅沢な富を得たことが記されています(黙示録 18:4)。新改訳では「彼女の極度の好色」と訳されていま

すが、「極度の」は「力、勢い」を意味する「デュナミス」(δύναμις)ということば。そして「好色」と訳された原語は名詞「ストレーノス」(σπρήνος)(新約聖書ではこの箇所には使われていない語彙)です。つまり、反キリストと手を結んだ者たちがその巨大システムの中で、「これ以上ないという贅沢」を手にし、贅沢の限りを尽くしていたのです。主がどのようにしてそれを「除かれる」のかとえば、それは「一日のうちに」(黙示録 18:8)、いや「一瞬のうちに」(同 18:17, 19)、火で焼き尽くされる(滅びの比喩的表現)のです。黙示録 18 章 17~20 節を参照のこと。

●**エゼキエル書 26~28 章**にはツロのさばきの預言、ツロの哀歌、そしてツロの君主の終局が語られています。繁栄の都ツロを象徴する豪華船が大海原で、バビロンを象徴する「東風」(東の砂漠から吹く熱風)にあおられて沈没します。同時にすべての船荷も失われ、ツロは再起不能の災いに遭い、滅びます。ツロの滅亡を悲しむ者たちの哀歌が 27 章です。こうした悲哀は、ヨハネの黙示録 18 章 17~19 節の大バビロンの滅びに対する哀歌と、多くの共通点があります。つまり、繁栄を誇っていたツロの機能が一瞬にして破壊されたことと、同じく繁栄を誇っていた大バビロンの機能が一瞬にして破壊されたことがオーバーラップしているのです。

●ツロの崩壊、大バビロン(反キリスト)の崩壊、こうした栄枯盛衰はいつの時代にも見られます。ツロの霊、大バビロンの霊は、サタンの霊です。かつてサタンはイエスを誘惑しようとして、世界の国々の繁栄を見せ、自分を拝むなら、ひれ伏すなら、これらの国々を治める権力と栄光を与えようと言いました。イエスはこの誘惑を跳ね除けましたが、多くの者たちがこのサタンの申し出(偽りごと)を信じてそれを手にしてきました。しかしそれを掴むや否や、一瞬にして崩れ落ちるのです。サタンは「偽りの父」です。この世の華やかさ、豪華さ、繁栄などに心動かされるならば、やがて失望の運命に終わるのです。そのことを聖書の歴史から学ばなければなりません。

●私たちが信じようが信じまいが、神のことば、神の預言は必ず実現することを私たちは悟らなければなりません。目に見える今の世界情勢を見て判断するのではなく、あくまでも神のことばによってこれから起こることを知るので、歴史を舞台にしてご自身を現わされた神のあかし、これまでの歴史で実現したことを知るなら、これから神がなにをなさるのが見えてきます。